

新たな不登校が生じない取組 「未然防止」の取組

不登校が生じない魅力ある学校・学年・学級づくりの推進

【取組1】(A中学校)

学校内に誰でも自由に入り使用できる「ひろば」を設置している。「ひろば」には生徒が興味をもちそうな本が並べられ、コミュニケーションを取りやすいように椅子や机、さらには畳が敷かれており誰もが自由に利用することができる。使用に当たってはルールを設けており、生徒一人一人が安心して使うことができるために、何が必要かを考えることにつながっている。このように自由に使える場所が認められているという雰囲気、生徒の居心地の良さにつながると考えている。



【取組2】(A中学校)

文化祭の前日に、生徒主体の集会が開かれた。クラスや部活動のリーダーが文化祭当日に向けた決意や努力してきた取組を話した。文化祭に向けて、クラスや部活動で練習してきたことを振り返り、文化祭当日に向けて意欲を高めることができた。

各リーダーの発表を通じて、生徒相互の努力を知り、認め合うことにつながり、当日は勝ち負けだけでなく達成感や充実感を多くの生徒が味わうことができた。



【取組3】(A中学校)

生徒指導を意識した授業として、英語科では、重点的に学習したい英文や問題を生徒自らが選ぶ時間を設けている。その時間に、グループで取り組むことで、英語に苦手意識をもつ生徒も授業に参加しやすい雰囲気づくりを行っている。社会科では、選挙において投票率が低い原因を分析し、改善策を話し合い発表する学習活動を行った。お互いの発表を聞き、良いところを見付けるよう指示して、安心な授業の風土づくりを配慮している。

【取組4】(B中学校)

生徒意識調査の分析結果を利用して、「不登校の未然防止」の視点で生徒の状況を校内研修で確認した。教員による事前の予想と実際の生徒の結果を提示し、教員が考えているよりも生徒が「学校を楽しい」と感じていることを分析結果として伝えた。また、今後必要と考えられる不登校生徒への支援を東京都の事例を活用して紹介し、校内においての課題を考えることにつながった。

多様な学びの場を確保する取組

（「早期支援」及び「長期化への対応」の取組）の推進

支援会議（C中学校）

支援が必要な生徒に「いつ、どこで、どのような」支援が必要か、管理職、SC、SSW、教職員、不登校対応巡回教員がそれぞれの立場で支援策を考えている。重点的に協議する必要のある生徒だけではなく、支援を必要とする生徒に配慮するよう時間配分することで適切な支援がいきわたるようにしている。

アウトリーチによる支援（D中学校）

家庭訪問による信頼関係の構築を行った。担任、不登校対応巡回教員、SSWが連携して訪問時に生徒の様子を確認するなど、協力体制を構築した。

学校行事の持参物の連絡などで、電話での連絡が取りづらい家庭には、訪問して連絡内容を伝え、生徒の状況を確認することができた。

校内別室における支援（E中学校）

信頼できる大人との関係を作り、徐々に生徒同士のつながりが高まるように、トランプなどを通じて、コミュニケーションを楽しむことを大切にしている。また、校内別室で楽しく過ごすためのルールを生徒で考えるようにし、自分たちで作ったルールを常に改善するなどして自己肯定感を養った。

また、クイズ形式や要点がまとまった各教科の教材を用意したり、関連する資料を映像で投影して提示し、簡単な補足説明を行って学習支援を行ったりするなど、校内別室を利用する生徒の状況に応じて学習意欲を引き出す工夫を行った。

デジタル機器を活用した支援（A中学校）

校内別室を利用している生徒にはオンライン授業を勧めている。担任と相談して授業を配信する教科を決め、学習を支援している。



関係機関との連携（D中学校）

毎週火曜日の午前中にはNPO法人の居場所支援施設の職員が校内別室にて、校内別室を利用している生徒と活動している。体験的な活動や個に応じた学習支援など生徒の状況に応じた様々な支援を実施している。

成果

校内別室指導において、校内別室に在籍する1～3割の生徒が登校日数や在校時間が増加している。不登校支援の視点を教職員がもつことで学校全体において安心できる雰囲気づくりが進められた。

課題

不登校生徒の状況を把握したり、対応についての方針を決めたり、保護者対応をしたりする等、担任が担うことが多いため、業務を分散し連携して取り組むことが必要である。